

# 歴史（近現代史）：ビデオ教材と確認テストの導入で、 知識の定着を図る

村山 航

「夏休み学習ゼミナール」で行った歴史の授業は、全5回にわたって行われた。範囲は、中学2年生の夏休みの段階で未習事項である近現代史（世界史）を扱った。具体的には、第一回「第一次世界大戦」第二回「ヴェルサイユ体制」第三回「冷戦～ドイツ分裂と朝鮮戦争（第二次世界大戦はカットした）」第四回「核と冷戦」第五回「ベトナム戦争」という内容であった。基本的には授業者の講義形式で進めるスタンダードな授業であったが、本授業の特徴は、以下の3点に集約できると思われる。すなわち、1. 視聴覚教材（ビデオ）の導入、2. 毎回の確認テストの導入、3. 質問シートの導入、である。これより、それぞれに関して導入の理由と実際上の効果（学習者の反応）について考察を行いたい。

## 1. 視聴覚教材（ビデオ）の導入について

### （1）なぜビデオ教材なのか

歴史は決して形式的な記号の世界ではない。その切り取られ方・構築のされ方はいろいろとあるとはいえ、人類が現実に歩んできた足跡が「歴史」というものの基幹をなしていることは疑いようのことだと思われる。それゆえ、「ケネディ大統領が暗殺された」は歴史になり得るが、「白雪姫が王子のキスで目を覚ました」は歴史になり得ないのである。だが一方で、歴史の教科書では、歴史の持つアリティを十分に表現できているとはいえない。このような事態において、学習者は、そこに記述されている史実に、イメージを抱くのが困難になってしまう。

このような事態に対処するためには、積極的に史実に対する「イメージ」を高める教材を導入することが重要だろう。学習者の「イメージ」を高めることによって、学習者が今学んでいる歴史というものに現実感を覚え、記号としての歴史学習からの脱却を図ることができると思われる。本授業では、そのようなイメー

ジを高める教材の中でも、「ビデオ映像」を導入することにした。イメージを高める方法として、他に教科書や資料集に挿入されている挿絵や写真を積極的に活用することや、歴史の資料の実物に触れてもらうことなどが考えられる。しかし、ビデオの映像はそれらに比べ動的な側面が強く、より高い現実感を喚起させることが期待される。具体的には、1995年にNHKスペシャルで放映された「映像の世紀」よりいくつかの場面を選定して使用した。「映像の世紀」には、重要な史実に対する当時のビデオ映像が豊富に収録されており、また適切なナレーションも挿入されているため、学習者の史実に対するイメージを喚起させるのに適した教材だと考えられる。

### （2）ビデオ教材の活用方法について

ところで、ビデオ映像を教材とした歴史の授業自体が目新しいものかといえば、決してそうではない。筆者がこれまで見てきた授業の中でも、教師が何らかのテレビ番組を録画し、授業に用いていたものはいくつかあった。では、今回の夏休み学習ゼミナールにおける授業は、それらとどう違うのであろうか。言い換えるなら、今回の授業は、ビデオ教材の活用方法にどのような特徴を持っていたのであろうか。

本授業で特に特徴的のは、ビデオ映像の提示と授業者による講義を、1回の授業内において短い間隔で交互に行なったことである。具体的には、全5回の授業すべてにおいて、5分間の導入の後、【5分強の講義→5分弱のビデオ提示】というサイクルを3回繰り返した（残りの時間は確認テスト（後述）の準備と実施にあてた）。そして、ビデオ映像は、直前の講義に関するもの、もしくはその他の講義に関係するものが選ばれた。このような提示方法をとることによって、いくつかの効果が期待されると考えられる。1つ目は授業内容を効果的に学習できるということである。ビデオ映像はイメージを喚起させ、確かに学習者に歴史の現実を見つめさせることができるが、一方で内容が構造

化されてしまう。むやみに使用するとかえって学習を促進しない可能性がある。ビデオ映像の内容は、授業者の講義によってはじめて系統立てがなされ、適切な学習が生じる。逆に授業者の講義は、ビデオ映像によ

項目内容	平均点 (SD)
今回のテーマに関して、できる自信がついた	4.78 (1.02)
学校で同じテーマをやれば、よく理解できると思う	5.71 (1.13)

ってイメージとして意味づけられ、補強される。すなわち、視覚（ビデオ映像）と聴覚（授業者の講義）を併用することによって、授業内容は効果的に学習されるだろう。だがこの効果は、互いに関連するビデオ映像の内容と授業者の講義の、時間的な間隔が短いほうが生じやすいとも考えられる。両者の間隔が長い場合には、ビデオ映像の内容と講義内容を、学習者が適切に関連づけて理解することが困難になると思われるためである。よって、本授業のように短いインターバルでビデオ映像と授業のサイクルを繰り返すことは、より効果的な学習を促進すると考えられる。2つ目は学習者の注意力の持続である。学習者の注意力・動機づけの維持は授業者にとって最も大切な課題である。ビデオ映像の提示は、そのような学習者の注意や動機づけを維持させる方法の1つであるが、ビデオ映像を使ったとしても、それが長時間に及ぶにつれ学習者が飽きてくるおそれがある。本授業のように、講義とビデオを交互にテンポよく回すことによって、学習者の動機を授業時間中ずっと維持させることができると考えられる。

もちろん、このような方法にデメリットがないわけではない。短いサイクルで映像の提示と授業を交互に行うためには、映像と授業内容の対応づけを入念に考えておく必要がある。よって、映像の選定と授業計画の立案に、通常よりも大きな負担がかかることが予想される。授業で示したいことに対応する適切な映像資料が見つからないこともあるだろう。また、授業者がそのような映像資料の所在に対して、ある程度の知識を有している必要がある。だが、以下に述べるように、今回のゼミナールにおける歴史の授業は概ね好評であり、このような形式は、授業者の負担に見合だけの成果をあげえるものだと考えられる。

### (3) 学習者の反応

今回の学習ゼミナールでは、ビデオ映像を用いないで授業を行う統制群を設けていない。よって実際にこのような授業が学習や動機づけに効果を持っていたか

は、厳密に明らかにすることはできない。だが、最終アンケートの結果などから、何らかの考察を導き出すことは可能だと思われる。以下それについて、学習の側面と動機づけの側面から見ていきたい。

まず、学習の側面として、「歴史に対する自信（自己効力感）」がつくようになったかという観点から検討していきたい。下表は、そのような自信がついたかを問うアンケートの結果である。

アンケート項目は1点が「まったくそうでない」4点が「どちらともいえない」7点が「まったくそうである」を示している。このようにして考えると、すなわち、最大が7点、最低が1点である。今回ゼミナールの歴史の授業を受けた学習者の多くに、歴史ができる自信がついたという結果と考えることができるだろう。特に2つめの項目は高い得点を示している。授業に対する「理解」が促進されていなければ、学習者の自信がつくことは考えにくい。よって、今回の学習ゼミナールの授業は、学習者の理解を促進していたと考えてもよいと思われる。

「理解」ができたかどうかに関しては、「授業の分かりやすさ」を尋ねたアンケート項目からも窺い知ることができる。今回、受講者に対し、さらに別のアンケートの中で、「歴史の授業は分かりやすかった」という質問項目を1点（まったくあてはまらない）から5点（とてもあてはまる）で回答してもらった。結果、平均点は4.32（標準偏差0.78）点であった。これも、歴史の授業が学習者の理解を促進していた傍証と考えることができる。

もちろんこれらの結果が、ビデオ映像を用いたためであるかどうかは判別できない。しかし、事後アンケートの自由記述では「分かりにくいか、と思うところでビデオを見せてくれて、分かりやすく理解できた」「ビデオを見る事によって内容がとてもよく分かった」など、ビデオ映像の提示と学習者の理解を結びつける記述が多く見られた。ビデオ映像と講義を交互に行う授業形態が、理解を促進する一端を担っていたことは間違いないだろう。下表は、動機づけ側面に関するアンケート結果である。

項目内容	平均点 (SD)
授業をおもしろく受けることができた	6.16 (1.18)
授業自体を楽しむことができた	6.04 (1.01)
授業をあまり楽しむことができなかつた	2.08 (1.26)

やはり1点から7点の間で評定してもらった結果で

ある。全体として、学習者の授業への動機づけは非常に高かったといえよう。別のアンケート（5点満点）でも、「歴史の授業は楽しかった」という項目に対し平均点は4.62（標準偏差0.67）点という高い値を示している。もちろん、この結果のすべてをビデオ映像の導入に帰属することはできない。しかし、「聞いて書くばかりでなく、見て（ビデオ）勉強できるのはあまりつかれないし、ヨカッタです」「ちょうど授業にあきてきたところにビデオを見てくれてよかったです」といった自由記述的回答に見られるように、ビデオ映像と講義を交互に行う授業形態が、学習者の動機づけの喚起・維持に役に立ったということは、疑いのないことだと思われる。

## 2. 確認テストの導入について

### （1）なぜ毎回確認テストを行うのか

今回の学習ゼミナールでは、毎回の授業後、その日の授業内容に関する確認テストを行った。ただし、いきなりテストを行うのではなく、授業終了後に5分程度の見直しの時間を与えてから確認テストを行った。通常の学校ではあまり見られない方法だと思われるが、毎回確認テストを学習者に課すのは、全5回という限られた回数でしか授業を行えないからではない。筆者は毎回の授業後に確認テストを行うことが通常の授業形態でも重要であると考える。

テストのための勉強は、一種の復習である。また、復習とは学習することである。ところで、効果的な学習を行うために、もっとも重要なことは、学習内容を暗記するのではなく「理解」することである。すなわち、学習内容を相互に知識の中で関連づけて構造化することが効果的な学習である。逆に学習内容が断片化したままであるなら、それはいくら時間がかけられても効果的な学習とはいってできないだろう。よって、復習やテスト勉強もそのような意味的な関連づけがなされるような形で行われるのが望ましい。だが、定期テストの前などに授業用のノートを見て復習する場合、学習者が意味的な理解をしたくともできない場合がある。それはたとえ授業中にその内容を理解していても生じる可能性がある。なぜなら、とられたノートというものは、どんなに丁寧にとったとしても、授業中に実際に受け取った情報量よりも小さくなってしまうからである。

このように考えると、授業終了直後に復習の時間を与え、確認テストを実施することの意義が見えてくる

だろう。すなわち、授業中の記憶が新しく、ノートを見返していくもある程度意味的な理解が行いやすい段階で復習をすることは、後の段階で復習をするよりも、効果的な学習に繋がりやすい。授業中で「何となく理解できた」ことを、より強固な理解につなげるか、それとも断片化に陥るかは、授業直後の復習に大きく依存しているのである。もちろん、テストという外的な誘因を与えずに、学習者が自動的に復習を行うよう促進するのも1つの方法である。だが、この方法ですべての学習者が復習をするとは思えない。それよりは本授業のように、最初はある程度外的な誘因で復習を全員に課すことが大切なのではないかと思われる。それによって、その後の自律的な学習は促進されるのではないかだろうか。

### （2）確認テストの評価について

確認テストを行うからには、授業者は学習者に何らかの評価を与えることになる。本授業ではそのような評価に関し、「個人内評価（進歩の評価）」という形態をとった。具体的には「学習記録シート」というものを準備し、授業者が毎回の確認テストの点数を記して学習者にフィードバックした。その際に、「『前回の自分』の成績よりもよい成績を修めることが毎回の目標であること」、「他人の点数は気にしないこと」（したがって、テストの平均点なども公表しない）を強調し、適宜成績をアップさせるためのワンポイントアドバイスを記した。また、学習記録シートには、学習者の成績の伸びを示すグラフも描画した。

学習評価とは諸刃の剣である。学習評価の情報が学習者に適切に利用され、学習の改善に繋がることもあれば、やる気の喪失といった何らかのネガティブな影響を持つ場合も多い。学習評価の方法は、授業者の側がしっかりと考えて準備をしておく必要がある。一般的に相対評価は学習者に弊害をもたらすといわれているが、一概にそういえるわけでもなく、どのような評価方法を用いるかは状況に応じて見極めなくてはならない。本授業で個人内評価を用いた理由は、学習ゼミナールという特殊な授業の状況にあった。

学習ゼミナールは、（1）期間が5日間に限られていること、（2）公立から私立まで多様な学習者が参加するため、参加者の学力の幅が広いこと、という特徴を持っている。学力の幅が広いということは、共通の到達度基準といった絶対的な基準を設定するがあまり意味を持たないことを意味する。一方、個人内評価においては、各自の前回の成績が次回の到達度基準と

なり、各学習者にとって最適な水準が要求されることとなる。また、5日間という限られた期間内でのみ形成された集団において、相対評価をすることにはやはり意味が見受けられない。むしろ限られた期間で何らかの達成感を学習者に持つてもらうことが重要であり、その意味でも「初回の自分より伸びた」という感覚を持ちやすい個人内評価は、この学習ゼミナールにおいて最適の評価だと考えられる。

### (3) 学習者の反応

確認テストが、学習者の学習によい影響を与えたかについては、今回のアンケート結果から直接的に確認することはできない。しかし、先ほどの見てきたように、この学習ゼミナールを通して、学習者が自己効力感（できる自信）を得たことは確かであり、その原因の1つに、この確認テストを実施したことが考えられる。実際、自由記述の回答の中にも「テストで（授業内容が）確認できてよかったです」「テストをしたので、自分がわかつていいく所がよくわかった」というような記述も見られた。

さて、「テスト」というものを導入するにあたって、注意しなくてはならないことは「テスト」に対する学習者のネガティブな反応である。いくら確認テストが学習者の学習を促進したとしても、テストへのネガティブな反応によって学習者が動機づけを低下させてしまうと、確認テストの意義が薄れてしまうだろう。また、そもそも学習者が確認テストに真剣に取り組んでくれなければ、今回の確認テストの導入に対する意味がなくなってしまう。この点に関してアンケート結果をもとに考察を進めたい。下表は、今回の確認テストに対する学習者の認知を尋ねたアンケート項目の結果である。

項目内容	平均点 (SD)
確認テストでいい点をとることを目標にして授業を受けた。	4.57 (1.83)
授業後のテストはあった方がいいと思う	4.59 (1.59)
返ってきた確認テストの見直しをしっかりととした	3.91 (1.71)

これまでと同様に1点が「まったくそうでない」4点が「どちらともいえない」7点が「まったくそうである」を示している。このアンケートの結果から、学習者は確認テストに対して、比較的好意的な認知を行っており、しっかりと確認テストに対する意識を高めていたことが分かる。このような結果が出てきた理由

として、個人内評価を用いた「学習記録シート」の存在が挙げられるだろう。今回のゼミナールに対する保護者の感想の中に「日々、テストの点数が上って行くのを本人は、大変喜んでいました」という記述が見受けられたように、個人内評価と授業者からのコメントを加えた評価のフィードバック方式が、普段はネガティブになりやすいテストに対する認知をポジティブな方向に転換させた可能性が考えられる。

### 3. 質問シートの導入について

#### (1) なぜ質問シートを導入するのか

本授業では、学習用のノートの最後に「質問シート」という欄を設けた。学習者は、毎回の授業後この質問シートに、授業に関する質問や感想などを自由に記すことができる。また、このノートは毎回学習者が帰宅する直前に回収され、授業者はそれぞれの質問に対し回答を書き込む。ノートは次回の授業前に学習者に返却される。この質問シートは以下の2つのねらいを持って導入された。

1つは、授業内容を十分に理解できなかった学習者を支援するためである。通常の学校では、授業内容を理解できなかった学習者は、友人に聞くか先生に直接質問をしに行くことができる。しかし学習ゼミナールでは、同じ学校の友人が1人もいない学習者も多く、友人に聞くことが難しい。また、授業終了後は（夜が遅いため）すぐに帰宅する必要があるため、授業者への質問時間も満足に取ることができない。質問シートは、学習ゼミナールにおけるそのような制約をクリアするために導入されたといえる。また、質問の内容は他の人には公開されないため、「恥ずかしくて質問できない」学習者も気軽に質問ができるというメリットがある。援助が必要なときに適切な援助を求めることができるのは、よい学習者の1つの要件であるが、実際の学校においても、自尊心や羞恥心が妨害して友人や先生に質問をすることができない学習者は多いと思われる。完全非公開の質問シートは、他者の多様な意見に触れられないというデメリットも併せ持っているが、それまで学校で積極的に質問をしにいけなかつた学習者の学習を支援するツールとして、有効であると思われる。

2つ目は、学習者とのコミュニケーションを図るためにある。質問シートには、授業に対する質問だけでなく、授業への感想なども含め、原則として何を記入してもよいこととなっている。学習ゼミナールは、短

期間であるなど、その時間的な制約のため、学習者とコミュニケーションを図る機会が非常に限られている。だが、学習者と積極的に意思疎通し、良好な関係を築くことは、よい授業を行う上でも非常に重要なことである。質問シートを通して、他愛のない会話であってもインテラクションを続けていくことは、よい授業者と学習者の関係を育み、学習ゼミナールの成果をより一層高めるものになると思われる。

#### (2) 学習者の反応

全体を通して半分以上の学習者が、質問シートに記入を行った。その内容は授業内容に対する確認（「サイクス・ピコ条約のところを聞き逃したのですが、どういうことでしたっけ？」など）、授業内容をさらに発展させた知識を問う質問（「イギリス・フランスの植民地を教えてください」など）などから、授業とは全く無関係のもの（「先生には彼女がいますか？」など）まで、多岐にわたった。

授業内容に関連する質問に答えることは、「質問をしたことに対してとてもわかりやすい答えが返ってきたのでうれしかったです」といった自由記述的回答に見られるように、全体として肯定的に受け止められたようであった。このような質問に対する個別の回答が、学習者の学習を促進したり、普段は質問をしにくい学習者の質問を引き出すことに成功したかに関しては、明確なデータは得られていない。しかし、ある質問に対する回答を行った際、その回答がさらに次の質問を引き出すようなケースがいくつか見られたことから、質問シートへの回答が、学習者の何らかの知的好奇心を引き出している可能性が考えられるだろう。

授業とは全く無関係の質問の果たした役割も重要である。今回、授業とは全く無関係の質問に対しても、返事を記して返却したが、そのような学習者はほぼ必ず、次の質問シートにも何らかの質問を記していた（授業に関係のある場合もあれば、また無関係の場合もある）。そのようなことを通じて、授業者は学習者のことをより広く把握することが可能になり、授業中の学習者に対する視点も大きく変容することになった。今回、わずか5回という短期間の授業でありながら、授業者が学習者（全約80名）の顔と名前を覚えることができたことも、この質問シートによる学習者とのコミュニケーションの果たした役割が大きいと思われる。

### 4. 全体を通して

全体を通して、全5回の歴史の授業は滞りなく終えることができた。アンケート結果を見る限りでは、授業は概ね好評であったといえるし、学習者の理解もそれなりに促進されたと考えてよいだろう。最後に、反省点を2点述べておきたい。まず、確認テストの内容が全体として難しすぎたことである。確認テストは記述式テスト、もしくは空所補充型テストであったが、特に記述式テストが難しく、最初はなかなか解答欄を埋めることができない学習者が何人かいた。授業後半になるとそのような学習者は1人もいなくなったものの、今後、実施する確認テストの内容の検討を行う必要性があると思われる。2つ目は、質問シートに返事を書くために、学習者のノートを授業者が毎回回収していた点である。最終回のアンケートを見ると、授業の復習をするために、ノートは持ち帰りましたと言っている学習者・保護者が幾人か見受けられた。学習用のノートと、質問シートは別のセットとして構成し、このような問題点が生じないようにする必要があるだろう。